



松前町(茂草) 渡島大島と夕陽

[illegible]

NO. 121

平成25年12月1日

夕陽会渡島支部

事務局

八雲町・雲石小学校



S校長と「寮歌」

夕陽会渡島支部副支部長

高橋伸夫

この四月に、福島町へ異動しました。新卒以来実に三十年ぶりの勤務となりましたが、異動の際に、大変お世話になった方から電話をいただいたのです。私が勤務して四年目、職場を共にしたS校長の奥様からでした。私の福島町への異動を大変喜んでくださり、亡きS校長も同じ思いではないかとの内容でした。

S校長は、音楽が専門で大変歌の上手な先生でした。中でも大好きなお酒が入った席では、決まって「寮歌」に始まり「相撲甚句」や「道南口説節」の見事な喉を披露してくれました。その時のS校長の心は学生時代へとタイムスリップし、当時の函館校の様子を楽しそうに語ってくれたものです。今考えると、貴重なお話を伺っていたものだと思います。そのS校長はすでに他界されてしまいましたが、現任校の廊下に掲げられた写真から、毎日私を励ましてくださっています。私が、夕陽会渡島支部の活動に関わるようになって久しいのですが、「新会員歓迎会」や「勇退者激励感謝の会」のクライマックスでの「寮歌」大合唱では、必ずS校長が思い出されます。歌詞を見なくても歌える程まで、数多く聞かせてくださったS校長には感謝の気持ちでいっぱいです。

これからも、S校長の子どもたちを常に中心に据えた教育活動を心に納め、「土地開墾」「人民蕃殖」の母校開学の精神を引継いで、日々の職務に努めてまいります。

「すべては 子どもたちのために」



福島支会幹事長
(吉岡小学校)

竹下 正彦

福島町は北海道の南西部に位置し、南は津軽海峡、北は大千軒岳に囲まれた自然豊かな土地です。特産品のするめは生産量が全国最大級です。また、二人の横綱を輩出しており、「横綱の里」とした町づくりをしています。教育にも力をいれていて、今年度、学力向上委員会による秋田県への視察研修を実施し、その成果を生かすべく各種取り組みを実行中です。

福島町には、小学校二校（福島・吉岡）、中学校一校（福島）と福島商業高校があります。十九名の夕陽会員が、それぞれの学校で子どもたちに「生きる力」を育むために、日々力を尽くしています。

今回は、これらの学校の中から吉岡小学校の職員室の様子をご紹介します。

本年度で創立一三四年を迎える伝統ある吉岡小学校ですが、青

函トネル関係の工事が盛んであった頃には五百名を上回っていた児童数も年々減少し現在は三十六名となりました。

地域の方々はとても協力的で、各種行事では数多くの方に参加していただき、一緒に楽しく活動しています。この

ような地域に育まれ、吉小っ子は明るく活発で積極的な子どもに育っています。

小規模校の特徴を最大限に生かすために、福島支会長でもある幕田真二校長の強力なリーダーシップの下、一人ひとりの子どもの可能性やよさを生かし「活気・志気・元気みなぎる学校」実現に向け、

野沢和則、林武良、藤澤綾、竹下正彦の夕陽会員が中心となりきめ細やかな教育活動を展開しています。

これからも吉岡小学校は、「すべては子どもたちのために」全教職員が一致協力して、児童の「生きる力」育成に全力を注いでまいります。

職員室

「さわやか森中

さわやか森中生」



森支会幹事長
(森中学校)

佐藤 君博

森町（もりまち）は、南北北海道の内浦湾と秀峰駒ヶ岳の周囲に位置する町です。基幹産業は、農業や漁業、水産加工業であり、いかめし発祥の町として、また、駒見桜や青葉枝垂といった桜を世界で唯一見ることができる町として有名です。

森支会は、町内の小学校七校（石倉・濁川・鷺ノ木・森・尾白内・駒ヶ岳・さわら）と中学校二校（森・砂原）で、現職の会員は七十一名、OB会員は三八名の総勢一〇九名です。岩村吉男指導参与を中心に、九つの学校がしっかりと連携を組み、森町の子どもの健全育成に向けて、日々努力しています。また、OB会員は、

それぞれの立場で地域のために活躍されています。

さて、森中学校は昭和五六年に、旧森町内の七つの中学校を統合、「統合森中学校」として発足し、以来三年の歴史を重ねてきました。校舎は市街地から少し離れた、緑の多い閑静な高台に位置しており、校舎そのものは多少老朽化していますが、施設・設備は整備されており、広大な敷地にはゆとりをもって各施設が配られています。生徒たちは、自然に囲まれた素晴らしい環境の中で、明るく伸びやかに学校生活を送っています。

「さわやか森中。さわやか森中生」をスローガンに、「課題の意識化」「規範意識の高揚」の育成を目指した教育活動では、小川原隆男校長のリーダーシップの下、教職員が一丸となっており、取り組んでいます。その中でも一六名の夕陽会員は、中心的存在として、教育活動を支えています。

今後も同窓の絆を深め、他の職員や地域と連携して、子どもたちの育成に、力を合わせていきます。

支会だより

「強い絆で」



木古内支会長
(木古内小学校)

伊藤 良 美

木古内町は、平成二十七年開業の北海道新幹線敷設並びに駅舎工事が現在急ピッチで進められ、日々町の様子が変化していきます。町としても「北の大地の始発駅」をキャッチフレーズに開業に向けた様々な取組を企画しています。駅前通りを拡幅し、町並みに統一感を持たせたり街中公園を造成し、憩いの場を設けたり新幹線開業を契機に新しい町へと変貌しようとしています。また、地元食材を活用した「ほたて炙り丼」やゆるキャラ「キーコ」誕生、「はこだて和牛」を使った各種メニュー作りなどにも力を入れています。

そんな木古内町も三年前までは町内に小学校二校、中学校一校、木古内高等学校がありましたが、鶴岡小学校の統廃合、木古内高等学校の閉校と続き、現在は小・中学校各一校となつてしまい、教職員も二校合わせて

二十五名となつてしまいました。そんな中、木古内支会は本年度、小学校十名中学校三名の計十三名でスタートしました。

木古内支会(一) 会員の互助、親睦、団結をめざす。(二) 本部支部との連携・協力につくす。を活動方針として、事業を推進しています。本年度の支会総会・懇親会は七月二十五日に「清本鮎」で、ご来賓として夕陽会本部幹事長奥崎敏之様、渡島支部副支部長高橋伸夫様、木古内町教育委員会教育長野村広章様をお迎えして大変和やかな雰囲気の中で開催されました。地元の日本酒「みそぎの舞い」を酌み交わしながらのひとときは、胸襟を開き互いの絆をより深める機会となりました。

児童数・教職員の減少に伴い夕陽の仲間も年々減っています。が、少数精鋭の気概、そして会員同士が強い絆で結びつき、木古内町の教育発展・充実のため団結して努力していきたいと思っています。

支会だより

「幼・小・中・町教委 絆を深めて」



鹿部支会長
(鹿部小学校)

工藤 彰 子

鹿部は、秀峰駒ヶ岳を背景とし噴火湾の入り口に位置する町です。気候温暖で、全国でも数少ない間歇泉を見ることができ、また、豊かな漁場に恵まれ、新鮮な魚介類を原料とした水産加工業が着実に発展してきています。今から約四〇〇年前、青森県南部大湊から優良昆布の採取を目的とした移住が始まりました。これが開町の基とされています。昭和五十八年に町制を施行し、今年度は〈町制施行三〇周年〉の節目の年となります。これを記念し、NHKラジオ第一の番組「ふるさと自慢うた自慢」の公開録音も予定されています。

今年三月には、国道二七八号鹿部道路(鹿部バイパス)も全面開通しました。道南の幹線道路として観光周遊ルートの形成に大きく貢献することになります。また、噴火に備えるための避難

道路としても重要な役割を果たすことになるでしょう。

夕陽会渡島支部鹿部支会の今年度の会員数は、鹿部中学校七名、鹿部小学校十二名、しかべ幼稚園一名、鹿部町教育委員会一名、合計二十一名です。六月七日(金)には、鹿部町教育委員会教育長 山田豊司様、本部幹事長 奥崎俊之様、渡島支部監査 小林博様をご来賓としてお招きし、平成二十五年度の総会・懇親会を盛大に開催いたしました。総会では本部への協力体制の強化・会員相互の親睦・情報活動の活発化を図ることを軸に事業を展開していくことが確認されました。懇親会では、釧路市富原中学校から鹿部中学校に異動した藤原由紀子先生が新会員として、更に昨年度まで鹿部中学校に勤務していた郡司直孝先生(現・附属函館中教諭)もスペシャルゲストとして参加してください、楽しいひと時を過ごすと同時に同窓の絆を一層深めることができました。今年度を最後に鹿部中学校の岡頭慎一校長が御勇退される予定です。支会をあげて感謝の気持ちを伝えていきたいと思っております。

新会員 だより

「新たなスタート」



松前支会
(大島小学校)
松崎 寛子

本年四月より松前町立大島小学校に赴任いたしました。登別市立登別小学校で教員をスタートし、四年間勤務させていただきました。

他管からの異動ということもあり、赴任当初は不安な気持ちでございました。しかし、周りの先生方や保護者の方、地域のみなさんの支えのおかげで、充実した日々を過ごすことができています。新しい土地に来て、また「からスタート」した気持ちでおります。素直で一生懸命な大島小学校の子どもたちのため出来ることは何か、自問自答する毎日です。諸先輩方の背中に早く追いつくことが出

来るよう、精一杯努力してまいりたいと思います。

皆様には様々な場面でお世話になることと思います。今後ともご指導のほど、よろしくお願いいたします。

「再スタート」



松前支会
(大島中学校)
吉田 正

今年の四月から、松前町立大島中学校に赴任しました。

赴任してからの半年を振り返ると、学校での勤務が六年振りになるため、期限付きとして勤務していた当時と比べて、教育現場が大きく変容していたことに戸惑うことばかりでした。また、今まで全学年担当したことがないため、理科の実験準備などの教材研究に追われてしまい、あつという間の半年でもありました。

ただ、授業中、生徒が意欲的に実験に取り組む様子などを見ると、教師として再スタートをすることができたことの喜びを感じつつ、教師の職の奥深さも感じております。

最後に、この半年で今まで函

館で御縁があつた方々に再会する機会が多くありました。これから

も様々な御縁を大切にし、日々成長していけたらと思います。宜しくお願いいたします。

「半年が過ぎて」



福島支会
(福島中学校)
土田 賢

着任から半年、自分も初の学級担任として半年がすぎようとしています。ここまでの学級経営は「トライアンドエラー」の繰り返し。同じ失敗だけはおかすまい。と努力しながらも自分でなにか新しいことが出来ないかと挑戦する毎日です。

期限付きとして勤務した後志の地から渡島にうつり、様々な先生に支えられながら日々過ごしております。自分の力不足を感じながらも、夕陽の先輩たちを中心に支えていただく日々が、何よりも貴重で、何よりもかけがえのないものであることを痛感しております。

まだまだ拙い教員ではありますが、ぜひご指導ご鞭撻いただけますよう、改めてお願い申し上げます。

「夢を追う子供たちとの日々」



北斗支会
(浜分小学校)
松村 佳美

私は、今年の三月まで道東釧路市で中学校音楽科教員として勤務していました。念願の生まれ育った故郷、渡島の地で教育に携われることに日々喜びを感じています。また、初めて小学校で勤務する私に、丁寧に御指導くださる夕陽会の諸先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。現任校に赴任して、半年が過ぎました。最近、「先生が小学校の時の夢は何だったの？」と聞かれることがあります。「沢山あつたけれど、やっぱり先生になりたかったかな。」と答えると、口々に将来の夢を語ってくれる子供たち。それぞれの夢を追う一瞬に携われる、この仕事に就けた喜びを改めて実感する毎日です。

まだまだ未熟ではありますが、無限大の可能性と夢現大の力を持つ渡島の子供たちのために一杯努力していきたいと思えます。宜しくお願い致します。

「感謝」



鹿部支会
(鹿部中学校)

藤原 由紀子

平成八年に函館校の数学科を卒業し、釧路管内の三つの中学校に一七年間勤務させていただいておりましたが、この度鹿部町立鹿部中学校に赴任しました。鹿部町は雄大な駒ヶ岳に抱かれた噴火湾に面した港町です。真面目で素直な子ども達との学校生活は、感動と驚きにあふれ毎日充実しております。また同僚の先生方に助けられながら、少しずつ学校にも慣れてきております。渡島は故郷の秋田を離れて初めて暮らした土地で、大学の四年間夕陽会の皆様に育てていただいた地であることから、渡島の教育のために微力ではありますが、力を尽くせることは大変うれしく幸せなことだと感じております。

「目録」



森支会
(濁川小学校)

小野 俊英

教育行政での十七年間。いろいろな目線から多くの事を学んだ貴重な期間でもありました。道南から離れて初めて、夕陽の繋がりやの暖かさや大きさを実感しました。学校を離れてみて初めて、学校に寄せる地域や保護者の関心の強さを実感しました。今春学校に戻って改めて、子供たちと関わることでできる教職の素晴らしさを深く噛みしめているところです。

学力や体力の向上、生活習慣の定着やいじめの根絶など、学校の果たすべき役割はますます重要となっています。

大切なことは、この可愛らしい子供たちの十年後、二十年後を見通すこと、すなわち、私達が未来への目線を持つて、今できること、しなければならぬことに取り組むことだと考えています。是非、御指導をお願い致します。

「日々勉強」



森支会
(砂原中学校)

吉田 美沙

根室管内で七年間勤務し、この四月より森町立砂原中学校へ赴任して参りました。お世話になった方々との別れは口惜しくもありましたが、教師を目指して努力を重ねてきた渡島の土地で、新たなスタートを切られることに、今は喜びと期待を感じております。

砂原中学校では特別支援学級の担任をしております。わからないことばかりで、日々勉強です。どんな力を補ってあげたらいいのだろう、どうしたら学習したことが実生活と結び付いていくのだろう。うまくいかないことも多いのですが、少しでも生徒の成長や頑張りが見られると、大変嬉しく、私自身、もっと学びたい、そんな気持ちにさせられます。

まだまだ未熟な私ではありますが、学ぶ姿勢を忘れずに、頑張っていきたいと思っております。よろしくお願い致します。

「初志貫徹」



八雲支会
(八雲中学校)

長内 享公

本年四月に、八雲町立八雲中学校に赴任いたしました。教育者を目指し、学業に励んだ大学時代を過ごしたこの渡島で働けることに喜びを感じております。

こちらに赴任して七ヵ月。日々新しい発見があり、葛藤があり、先輩の先生方に様々な場面で助けていただきながら奮闘している毎日です。大げさな言い方かもしれませんが、そんな決して楽ではない毎日の中、やはり私が頑張ろうと思えるのは、生徒とのホッとする一時があるからです。「子ども達の力になれる教師になりたい。」私が教師を志した最初のころの気持ち、子ども達との触れ合いの中で再確認し、エネルギーに変えてこれからも頑張っていこうと思っています。

今も昔も変わらず、「子ども達のために」を忘れることなく職務に励んでまいりますので、今後ともよろしくお願い致します。

終身会員

の 声

便利な世の中に思う



昭和三十五年 一類
浜井 広 光

「便利になつて一番困るのは人間である」を何かで読んだことがある、

昨今、めざましい科学・技術の進歩によつて、今や社会はスピード時代の感がある。

家庭は電化し、指一本で用事を足すことができる程だ。乗り物は競い合つて最高速度を指している。スマホなるものも登場した。

自分の望む物、得たい情報は瞬時に獲得できる。それらがさらに進化しつつある実状にある程、随分と便利な世の中になったものだ。

しかし、待てよ？

これらの便利さをあまりにもうのみにして利用して見えるのは私だけのことか。

感謝も感動も慎重さもなく、ただ当然の如くに享受しているやうで氣になつてしょうがない。とりわけ、若い人達が便利さの中に夢中で受身的に飛び込ん

でしもう実態もある。
時には、それらが原因で事故や事件につながつたりすることすらある。

勿論、私は『便利さ』は人間に夢や希望、幸せを相当にもたらしていることは承知している。ただ、便利さを享受しながら時にはその影の負の側面をも考えてみることを忘れていないこと。を優えるのである。
今の人間、少し急ぎ過ぎではないか。
老人のたわごとである。



低学年の頃



昭和三十五年 一類
野村 満 夫

小学校低学年の頃を思い起こしてみる。

体育館に正座しての学校長訓辞の時、鼻紙が横に「誰のだ、これ」私は投げ上げた。壇上から降りてきて叱られた。怖かつたなあ。この時白尻小一年生。

「兵隊さんのため」等と言われ主に夏休み作業をした。

①ドンダ（イタドリ）採り、煙草の原料らしい。乾かして葉をコンブのように、湿らせ伸ばしたたむ。少しより作れなかった。
②道路直し、海辺から玉じやりを背負つて水溜まりに運んだ。先輩達と一緒にの作業は楽しかった。

③ゴム（スガモ？）叩き、海に生えるゴムをでかいイワシ釜で茹でる（ここまで大人）。それをかけやや石で叩いて柔らかくする。兵隊さんの服と言われた。
④飛行機の油？大豆より大きく黒っぽい斑点の種子が取れた。自分の背丈ぐらいの植物だった。



名は不明である。

⑤テントウ虫、ジャガイモの葉に群がり黄色い液を出してすごい匂いだった。死がいビンに詰めた。食料増産のためらしい。学校ではどうしたんだろう。

三年生の時が終戦。白尻港には掃海艇や貨物船等が寄港したりしたので数度の空襲があった。近くの防空壕やがて山（海岸段丘の上）に逃れた。木の陰から米機・米兵がしつかりと見えた。これ等のことを兄姉や同期の仲間となぜか話したことはない。夢まぼろしの如くなりである。

年金生活者冬の時代



昭和三十五年 一類
伊藤 行 男

時々年金制度の有難味を感じている。老後の生活を人間らしく生きがいのある生活ができるためには、何といっても福祉制度の充実である。中でも係わりの深いのは、年金・医療・介護である。高齢化社会に於て国が重視して取り組まなくてはならない課題の一つである。

十数年前から少子高齢化社会を迎えることで、予測した対策が講じられるべきであった。年金の財源は、現職に依存する仕組みは、限界が来ることは察知できていたはずなのである。今此に來て財源の工面は消費税で対応しようということである。

来年の四月から5%→8%へ次の年は8%→10%へと引き上げるとのことだ。それでも財源は不足であるということだ。今年の十二月支給から、減額措置分(2.5%)を三年で天引きされる。

又、恩給制度期間の支給額分

から27%分減額されることになっていく。更に、東日本の災害復興税が課せられている、加えて医療費、介護保険も重くなる見通し。

これで年金生活者が心配にならないはずがあるまい。あの人は感じて欲しい、年金で生活する人にとって将に「冬の時代」の到来である。今は、この状況を脱する取組が必要だ。一人の力は通用せず、大勢の人の力を結集することが必要、良い政策の実行を促す、強い努力をそなえておく必要がある。



なつかしい 小島小学校



昭和三十五年 一類
田 中 邦 夫

平成三年、校長職を命ぜられたのが児童数一五〇数名で六学級の松前町立小島小学校です。着任三ヶ月の新米校長にとって最初の試練は文化勲章受章者の金子鷗亭先生の来校でした。

創玄書道会の役員、町長はじめ地元の関係者等と母校である小島小学校を訪問して下さいました。足の震えを気にしながら子どもたちに鷗亭先生を紹介したり、来客に対応したことが今も鮮明に思い出します。

学級担任の平均年齢が二十四・五歳の熱気にあふれた若い先生方と過ごした二年間、たくさんの思い出をいただきました。

今年から小島小学校は私が太陽会渡島支部長をしていた久根別小学校と一緒に障害児教育の研究に携わった小寺先生が校長で、教頭が前述の小島小学校で教務主任をしていた体育科の後輩の小島先生です。二人とも私と関わりの深い先生でこんなこ

ともあるんだと驚いております。

九月に何とか時間の目途がつき、小島小学校を訪問することができました。児童数は二桁に減少し、松前町も学校の統廃合が進んでいることを聞き時の流れを感じていました。校舎を案内していただき、二十二年前の思い出が次々と浮かんできます。学校っていいな、もう一度戻れたらと感傷にひたりながら校舎を後にしました。あの二人ならいい学校にしてくれるだろうと期待をこめながら松前路を函館に向かい帰路につきました。

.....

公的制度の活用を知って



昭和三十五年 一類
古 川 喜 一

七十歳後半に向かう現在、教職退職互助会の一員としてブロックの世話人をさせてもらっている。その集まりで「いざという時の手続きのために」のテーマで、突然の避けられない事態への心構えについて話合った。

歩行困難、入院中や退院、親族が離れている等の問題を抱える高齢者も、本人自身による手続きが基本となつている諸制度についても話し合われた。

最近では、認知症の進行等で判断力が十分でない中で、介護施設の利用のための契約、医療や入院等よく聞かれる。

事情によっては、公的な支えや法的な制度を活用して対応することが大切と思う。

先日、家族に先立たれた友人の不安を相談され、任意後継制度について、行政書士と相談する機会があり、その内容を知り活用するかどうかの検討をしている。

将来に向かつて、安心感の持てる生活が続けていくためにも判断力がある時に、専門機関等と連絡を取り合うことも考えておきたいところである。

終身会員の皆様へ

「平成二十五年度 勇退者激励・感謝の会」を次のように開催いたしますので、ご案内申し上げます。

◎二月八日(土)

懇親会：午後五時より

◎会場 ホテル法華クラブ函館

◎会費(終身会員) 六千五百円

◎申し込み締め切り 一月十五日(水)

◎申し込み方法

同封の葉書にて

あとがき

新会員・終身会員の皆様の特集号『夕陽渡島』第二百一十一号をお届けいたします。御寄稿いただいた皆様には、大変お忙しい中での取組に、心からお礼申し上げます。今回は、発行時期を一カ月早めましたが、無事、発行できました。皆様の御協力に感謝申し上げます。